

本能寺の変、その最大の謎に迫る

1 本能寺の変、そのころの社会情勢

—信長はどこまで「天下を手中に」入れていたのだろうか

(1) 当時の情勢

- ・ 信長の勢い—中央の支配権をほぼ確立
- (2) 1582年(天正10)のできごと
 - ・ 天目山の合戦、武田氏滅亡
 - ・ 甲府の恵林寺を焼く(快川国師)
「滅却心頭火自涼」
 - ・ 三職(関白・太政大臣・征夷大將軍)推
任問題
 - ・ 徳川家康と穴山梅雪を安土に招待する



(3) 「本能寺の変」のあらまし

- ・ 光秀接待役解任→丹波国領地取り上げ→秀吉の救援軍→愛宕山連歌会→丹波亀山城から京都への進軍
→本能寺襲撃→二条御所襲撃



2 「本能寺の変」の通説は謎ばかり

(1) 信長と明智光秀の関係は悪かったのか

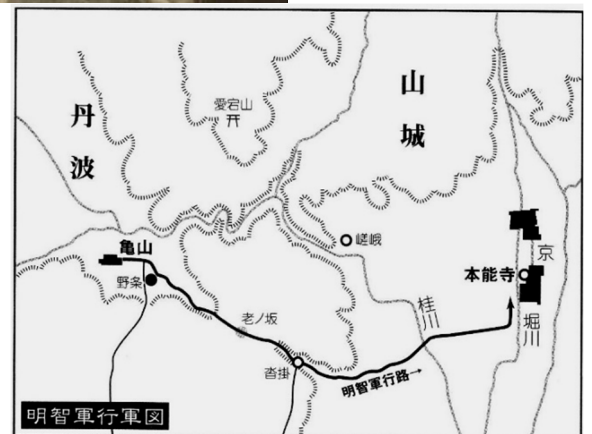
『自分は石ころのような身分から信長様にお引き立て
頂き、過分の御恩を頂いた。—(中略)—一族家臣は子
孫に至るまで信長様への御奉公を忘れてはならない』
(『明智家法』より)

(2) 具体的な事実から—非常に断片的な動機

- ・ 「接待役解任」について→「怨念説」
- ・ 「領地取り上げ」について→「危機感説」
- ・ 「愛宕山連歌会」時は今天の下知る五月かな→「野心説」
- ・ 「丹波亀山城から京都への進軍」→1万3000の行軍とは

(3) 一般的な本能寺の変の様子—「信長公記」

信長も、御小姓衆も、当座の喧嘩を下々の者共
仕出(しで)し候と、おぼしめされ候のところ、
一向さはなく、とき声を上げ、御殿へ鉄炮を
打ち入れ候。是れは謀叛か、如何なる者の企て
ぞと、御淀のところ、森乱申す様に、明智が
者と見え申し候と、言上候へば、是非に及ばず
と、上意候。



「本能寺焼討之図」(明治時代、楊斎延一画)

3 真実を記す様々な史料

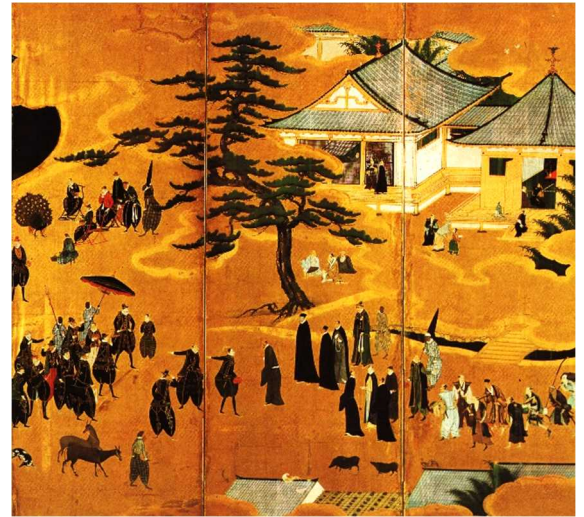
・「言経卿記」

二日、戊子、晴陰、

一、卯刻前右府本能寺へ明智日向守(光秀)依謀叛押寄了、則時二前右府打死、同三位中將(織田信忠)妙覺寺ヲ出テ、下御所(誠仁親王御所)へ取籠之處ニ、同押寄、後刻打死、京洛中騒動、不及是非了

・「ルイス・フロイスの記録」

天王寺(本能寺の誤り)と称する僧院の附近に着いて、三万人は天明前僧院を完全包囲した。(中略)わが聖堂は信長の所より僅に一街を距てたのみであった故、キリシタン等が直に来て、早朝のミサを行ふため着物を着替へていた予(パードレ・カリヤンならん)に対し、宮殿の前で騒が起り、重大事件と見ゆる故暫く待つことを勧めた。その後銃声が聞え、火が上った。つぎに喧嘩ではなく、明智が信長に叛いてこれを囲んだといふ知らせが来た。明智の兵は宮殿の戸に達して直に中に入った。同所ではかくの如き謀叛を嫌疑せず、抵抗する者がなかった。



「洛中洛外屏風より南蛮寺」

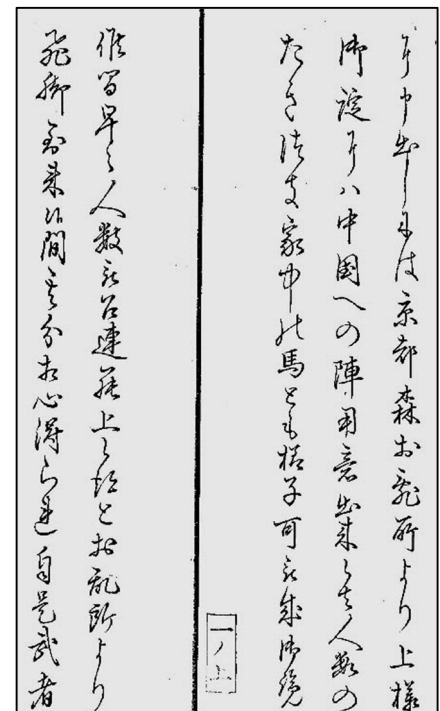
4 本能寺では何故「無警戒」であったのか

—光秀は信長に京まで来るよう命じられていた

・「川角太閤記」より

京都森お乱(森乱丸)より、上様御錠には、中国への陣用意出来候はば、人数のたきつき、家中の馬ども様子御覧なさるべく候間、早々人数召連れられ、罷り上り候得と、お乱所より飛脚到来候。

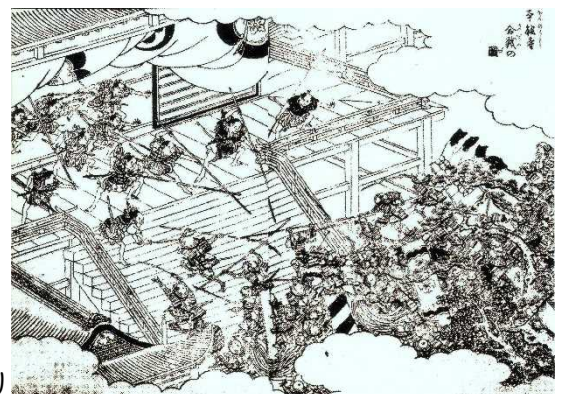
京都より森蘭丸がやってきて、「兵馬と整えて早く上京すように」という信長の御錠(命令)を伝えている。



「川角太閤記」は田中吉政に仕えた川角三郎右衛門が、秀吉と同時代の当時の武士から聞いた話をまとめた「聞書」や「覚書」を元にして書かれた記録書。同時代の人物の述懐が収録されている点で他の太閤記とは一線を画し、信ぴょう性も高いと評価される。

・「本城惣右衛門覚書」より—1930年発見、実際に本能寺の変に参加した明智家臣の記録

まさか、私たちが信長様に腹を召させるとは夢とも知りませんでした。その時は、秀吉様が備中で毛利輝元様と対峙していたので、明智さまが援軍を申しつけられたのです。京都の山崎の方向へ行くと思っていたら、逆の京都市内の方へ行けと命じられましたので、このときは討つ相手は徳川家康様であるとばかり思っていました。また、本能寺というところも知りませんでした。(抜粋)



「絵本太閤記」より

5 原因は「三職(関白・太政大臣・征夷大將軍)推任問題」か。

- ・正親町天皇と関白・近衛前久による、信長取り込み策の失敗
- ・天皇との対立関係を危惧したのが明智光秀。

6 本能寺の変の時に家康は堺で何をしていたのか

(1) 京都の陣所は茶屋四郎次郎邸…本能寺に程近い場所

- ・あまり興味のない「茶の湯」漬けの京都に9日間も滞在したのはなぜか。案内人は長谷川秀一(信長側近)

(2) 堺についてから何をしていたのか

- ・会合衆による茶の湯の接待、肝心な鉄砲の買い入れが行われていない
- ・宿所は「妙國寺」(日蓮宗)

(3) 堺滞在を二泊で切り上げ、またわざわざ京に向かう

- ・「信長に挨拶」の不自然さ
- ・中国戦線への出陣要請があった(『家忠日記』)

(4) 「伊賀越え」の日数の記録が「徳川実記」と異なるのは何故か

- ・『徳川実記』では7日に岡崎に着いたことに。
- ・わずか3日で「伊賀越え」をすることは可能か?

(5) 岡崎に帰ってからの動き

- ・10日目に出陣、鳴海に出陣して秀吉から報を受けるまで5日間滞在。早く動こうとしなかった。

5月15日	穴山梅雪と共に安土に至る
21日	信長に勧められ京に入った
29日	信長本能寺に入る。家康一行は夕方堺に入り松井友閑の饗応を受ける
6月1日	今井宗久、天王寺屋宗及、松井友閑の茶の接待
2日	本能寺の変、堺を出て京に向かう途中、変の報を聞き、急遽帰国の途に就く
3日	伊勢白子浜で乗船(夜半)
4日	朝、大浜に着岸、岡崎城に帰着
13日	山崎の合戦。光秀敗死
14日	鳴海まで出陣
17日	本隊は鳴海。先陣の酒井忠次は津島に至る
19日	秀吉より鳴海の家康に京の平定を報じられた

歴史の学び方—いくつかの説が存在することを認識する

- ・歴史学—「実証史学」と「文献史学」

様々な立場からの歴史的事実の捉え方について理解する。

現場の調査や発掘によって明らかになること

遺された文献や史料などから明らかになること

総合的に調べて、判断する

- ・「一次史料」と「二次史料」

歴史的事実を判断する際に使用する史料の「信憑性」の度合い

事件と同年もしくは近い年に記されたものか(日記、手紙、指示書の類)

後世になって、伝聞を基に記されたものか(江戸時代の歴史書など)

※「二次」だから間違い、という偏狭な史料観には賛成できない

「伝聞」や「伝承」から、当時の社会状況を判断できる。

- ・現場に行ってみましょう

新たな発見、また地元の人たちとの交流—新たな発見の場

- ・様々な書籍に触れてみましょう

わずかな史料に固執しない、幅広い知見を吸収してみる

